

「静脩」と交換されている

他大学の図書館報

「静脩」には他の国立大学図書館で生れたたぐさんの兄弟がいる。文字通り兄弟なので、「静脩」より先に生れたものもあれば、あとから生れたものもあるし、親が国であることにかわりはなくても、それぞれに性格もことなっているのは当然である。学内の図書館関係者を対象にしたもの、新着図書月報を中心としたもの、利用者との対話を主としたもの、月刊あり、隔月刊あり、旬刊あり、その性格はさまざまである。

その内当館と交換しているものを北から南の順で御紹介すると、北海道大学の「楡蔭」、北海道教育大学の「図書館報」、岩手大学の「図書館時報」、東北大学の「図書館通信」、群馬大学の「図書館報」、東京大学の「図書館の窓」、東京学芸大学の「図書館月報」、大阪大学中之島図書館の「ナカトニュース」、神戸大学教育学部分館の「図書館」、徳島大学蔵本分館の「MLニュース」、九州大学の「図書館情報」などである。なお、これらの館報を見たい方は、閲覧事務室参考掛まで。

学部図書室に望む

——特に自然科学系の場合——

近年における科学の発展にもなって、研究分野も細分化してきている。人間によって自然の理念が究明され、数々の着想のもとに科学体系が築き上げられてゆく。未知の世界へのさぐりのメスは、先人の築き上げた体系が大きな着想のよりどころとなる。その着想の基本となる歴史を通じての図書は、それぞれの研究分野にあって専門化して整理され保管されなければならない。

各学部には総合的な図書室があり、各学科、研究室にも専門書を中心とした図書が揃えられ、そしてまた研究者は各々に専門書を購読する。そのうちにはかなり重複するものもあるが、自分の手下に図書をもちたいという希望は研究者にとって、偽らざる気持というようなものである。現在にみる学部の図書室があまりにも多面にわたって図書を集約せんがために、専門書が少なすぎる傾向にあり、ただに文献雑誌・論文の保管場所ともみられる上に、その文献等の種類が少ないために、おおよそ図書室での利用は少なく、図書室を通じて図書の在り場所を紹介してもらおうというケースが多いように思われる。そのために、各学部、各研究室へ図書の利用のために奔走する。これらが相まって、いわゆる学部における図書室の存在の影がうすれ、その当然の結果として各学科または研究室単位での図書の充実化がみられる故に、学部における図書室のあり方が考慮されるべき時点にあるのではないだろうか。

私的な意見であるが、学部学生のための図書室であり、また研究者のための図書室でもあろうとするところに図書の充実性が欠ける原因があるように思う。

各学科において研究者のための図書を充実し、学部における図書室は、その総合管理保管をはかり、学部学生に主体をおいた図書の配備をすると共に百科図書の完備された特色があってほしいと考える。

その他利用方法の面から思うことは、貸出された図書があるために、必要な時にいつでも調べられるという“よさ”がないことである。必らず図書がその場にいつでも備えられていることは大切なことと考える。かりに貸出しを許す場合でも、休暇中の貸出しはあっても学期中は、閉室前より翌朝までの一晩単位であってほしい。そうなるとその場で文献等の複写を必要とする場合が生じるが、現今ゼロックス印刷機が配備されて来ているから、図書を借り出し、自分の学科に戻り複写して返却するという手間を省くためにも、自分の属していない学部で、ゼロックスを利用できるような方法が講じられないものかと考える。（農学部一利用者）